

第1回 植田久男書展

記録集

会期：平成15年7月28日（火曜日）～8月3日（日曜日）

会場：水戸市 アートワークスギャラリー

「来場の皆様へ

猛暑の中、また遠路ご来場いただき、誠にありがとうございます。拙い作品ではありますが、ご覧いただけましたこと、心より感謝申し上げます。

二〇数年来続けてきた絵画と並行して十年ほど書を学んできましたが、三年前の個展を機に、書に専念するようになりました。「習字の手習い」にある上手・下手のみではなく、自由に楽しむ書、芸術としての書、書の歴史や文化を人生の糧としてゆきたいと思うからです。

先人の語録に

「書画同時、書をかくこととは

自分を正すことである。」（中川一政氏）

「今日の芸術は、うまくあつてはいけない。

きれいであつてはならない。

「ころよくあつてはならない。」（岡本太郎氏）

といった言葉を励みとして、自分の目で見て、自分の体で感じて、自分の心が動かされたことだけを事実として汲み取り、それを自分なりの方法で、自分の力量で書いてゆくことが、書をたしなむ上で大切ではないか考えております。

とはいえ、まだまだ模倣と創造が錯綜している段階です。諸先生方、ご友人の方々からのご鞭撻を賜り、今後一層自己研鑽に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

平成十五年七月

第一回書展開催にて

植田 久男（愚海）

東海村書道連盟所属



「臨書」について

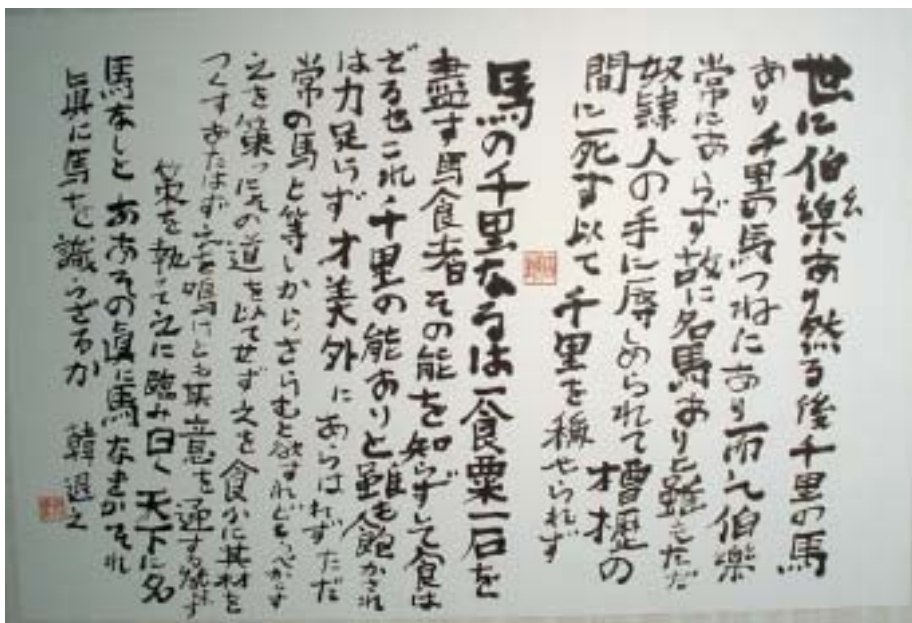
臨書は、古人との対話であると思っています。
 臨書は、上手下手を抜きにしてその臨書手本を
 好きになることです。

書の古典を臨書することによって、先人達の技
 を知り、その大いなる芳醇さに感銘します。
 じつと穴のあくほど観ること。

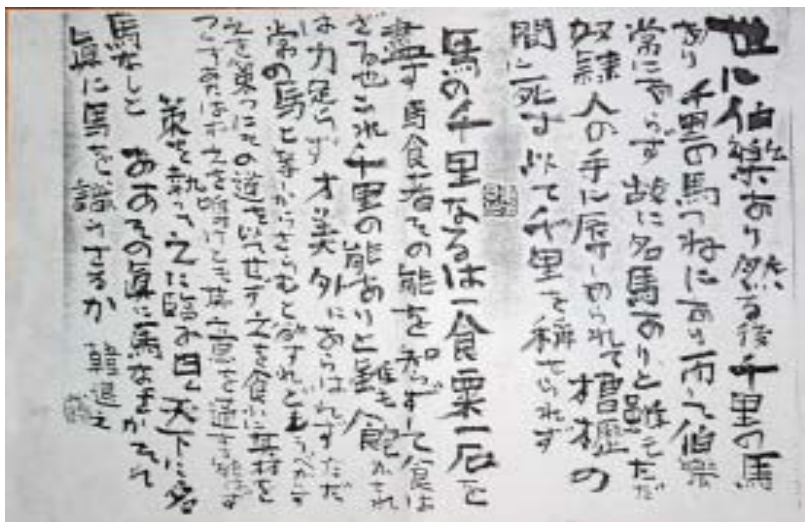
黙ってまねること。

そのまま字び取ること。

そうするとだんだん、一文字一文字からその頃
 の時代背景や文化、思想、哲学、人生観が聞こえ
 てくるのです。私たちが失いかけていた、大切な
 智慧や心豊かな感性を思い起こさせてくれます。



千里の馬 (臨書)



中川 一政書

世に伯樂あり、然る後千里の馬有り。千里の馬は、常には有らず。故に名馬有りと雖も、ただ奴隸人の手に辱められて、槽檻の間に死す、以つて千里を称せられず。
 馬の千里なるは、一食粟一石を尽す、馬を食う者その能の千里なるを知らずして食わざる也。これ馬の千里の能ありと雖も、飽かされば、力足らず、才の美外にあらわれず、ただ常の馬と等しからんと欲すれども得べからず。之を策うつにその道を以てせず、之を食うに其材をつくすあたわず、之を鳴けども其の意を通ずること能わず、策を執つて之に臨み曰く、天下に良馬なし、と。ああその真に馬なきかそれ、真に馬を識らざるか。

韓退之

「週刊朝日」がきまして、これを撮りにきたたんですね。「寒いときで悪いけれども、お前、裸になれ」と(笑い)。何でもやった。希望通り、「これはどうせ芝居なんだから、いくらでも芝居をやるといつて、裸になつて、これを持って、そこでもらみつけてとね。前方をならみつけて、これから出発する。「はい、撮りますよ。エイ」と、これを撮ったんですね(笑い)あのカメラマンはうまくなかったね(笑い)。どうかと思ひますが……。そういつわけでこれはすいすいです。



これを書く時、何を考えたかというのと、半分、冗談ですけども、このばか野郎と思つて、書家のくそばか野郎、みんな、くたばつてしまえと思つてひっかきまわしましたね。それで岸田さんじゃないけれども私は朗読をやるんです(拍手)。その当時、私がつくつた詩です。詩なんていう恥しいです、偉い人の前で。私がある本に……。あの本というと、あそこにありますから帰りに買つてください(笑い)。もう二冊しかないですけども。「お前の作品を載せたい。その下に、何か、文章をつける」というんです。それから作品はエナメルのナンバー九、こつち側の向こう側から二番目ですね。その作品の写真を載せて、その下につけた詩をいまから読みます。

メチャクチャ、デタラメに書け

ぐわあつとブチまける

お書家先生たちの顔へエナメルでもぶつかけてやれ

狭い日本の中にうろろしている欺瞞とお体裁をブツとばせ

お金でおれを縛り上げてもおれはおれの仕事をすろぞ

グワーッとブツタ切つてやる

書もへつたくれもあるものが

一切の断絶だ

創造という意識も絶する

メチャクチャ、デタラメにやつつける

というわけなんです(拍手)。でたらめなんです。いかにでたらめにやるか。でたらめにやっていますとだんだんとでたらめにできなくなつちゃうんですね(笑い)。こつちのは早くやめておかないと思ひまして、それで一年間でやめになりました(笑い)。

三十九歳の男が六十六になりました。最近、またある本から写真と文章、その作品の説明を下に書いて送つてくれと。作品に説明なんか、いらなひです。そこでまた歌をつくつた。二十たつたらどんな風になるか。今、書道会には現代書、現代書と現代書がはやっています。何でも現代じゃなければまずいと思つて、書にも現代をつけて現代書、現代書……。そこで……。そこで……。

現代書、現代書、現代書つて、何なの
インスタントラーメンのような近代詩文というもの
巧みな筆さばきを堅持する少字数書というもの

これは書家でないとあまりわからないでしようね
絵かきのできそこないにもならぬ前衛書というもの
伝統派と称する安普請技術派とともに
まね盗作に浮き身をやつす
無能の怠情者

そして勤勉者

勤勉な人もいるんですからね(笑い)

いかものや、にせものの横行する世の中

もろもろのくだらぬものを吹きはらう

おお、峻烈の風よ、吹け

書に命を賭ける者よ

勇氣と誇りとをもつて

偉大な書の歴史をつくらう(拍手)



「週刊朝日」1956年



井上有一の言葉（１）（全紙 1/3）

「メタクタ」「デタラメ」

「井上有一」という、とんでもない書の人と出会ってしまいました。天から舞い降りて『貧』や『花』などの字をたくさん残し、壮絶な書の鬼となつて私たちに迫ってきました。そしてまた天に帰ってしまったような人でした。

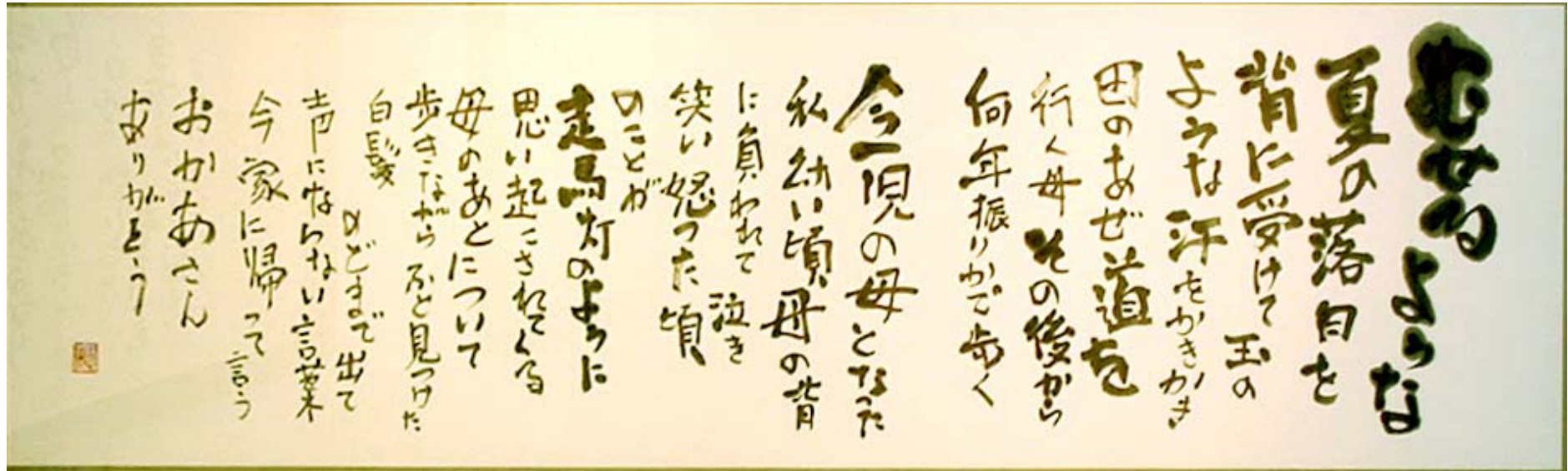
私もメチャクチャデタラメやつてみようよと、きれいごとを捨て、少々気違ひじみた気分で向かいましたが、でたらめになりません。

私の中にある何かが邪魔していますね。「常識」だとか、「見た目」とか、「体裁」、「技術」、「世間体」……



井上有一の言葉（２）（全紙 1/3）

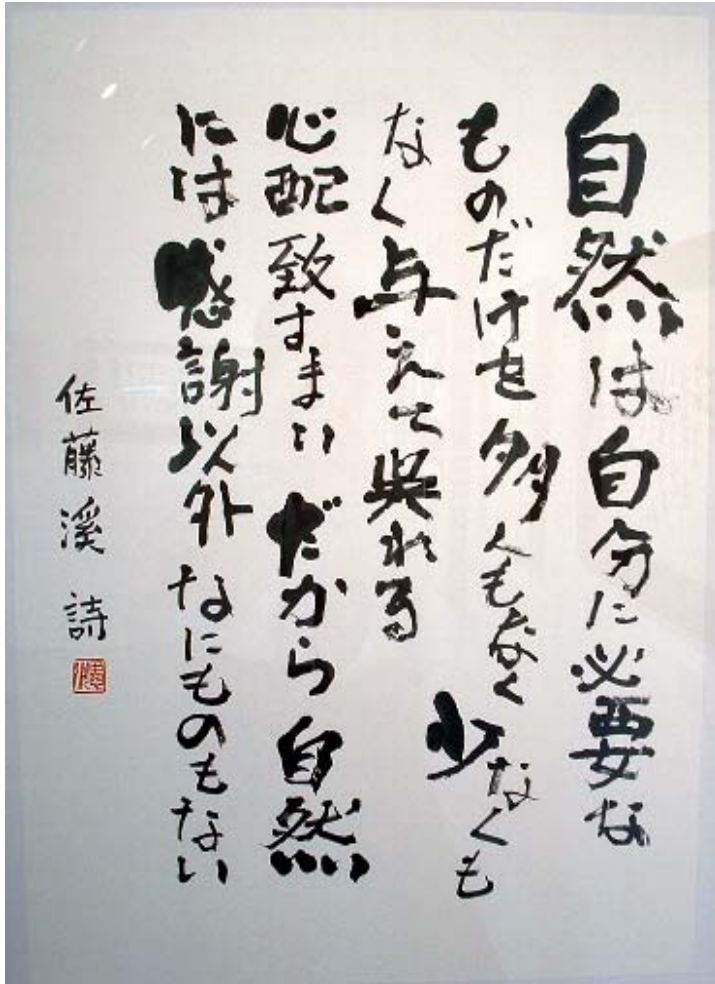
メタクタになってしまいました・・・とほほ



落日（半切）

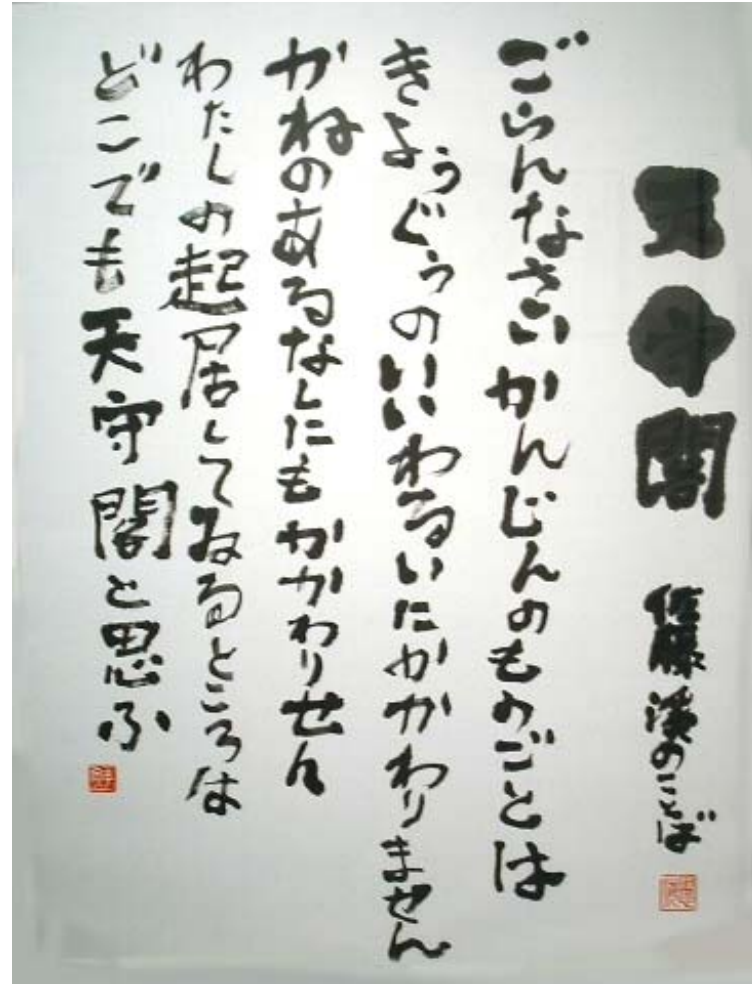
詩集「おかあさん」から

わずかな畑でしたが、野良仕事を手伝ったことが思い出されます。
母の後姿、緑の畑、土や草のにおい。遠い遠い記憶
となっていました。あの頃母も若かった。



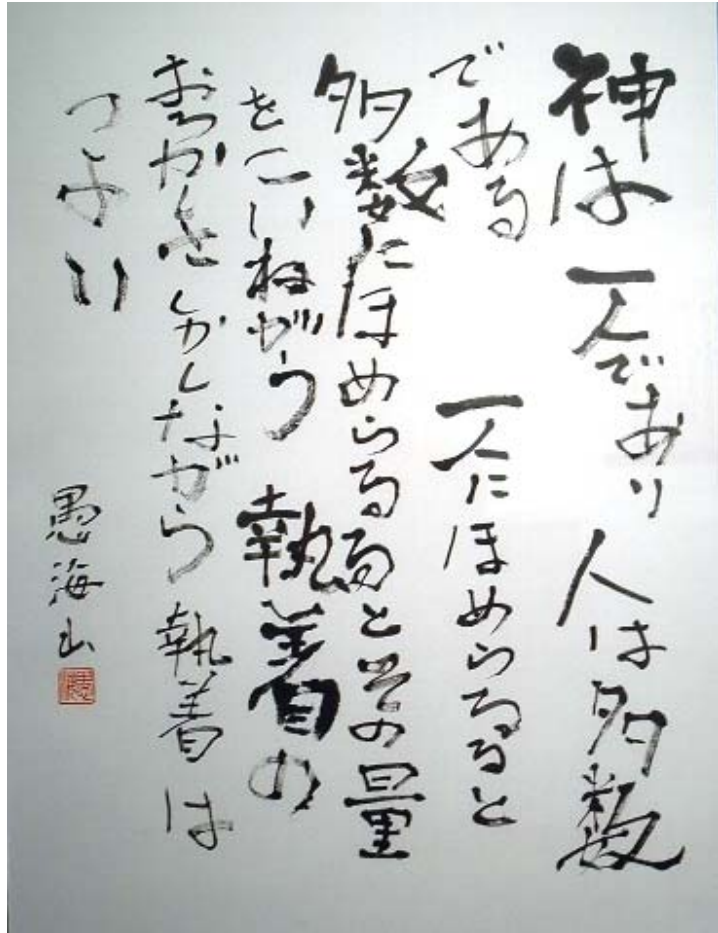
自然の恵み (全紙 1/3)

現代社会に重要なこと。感謝。家族に感謝、世の中の人に感謝、地球に感謝、神さまに感謝です。



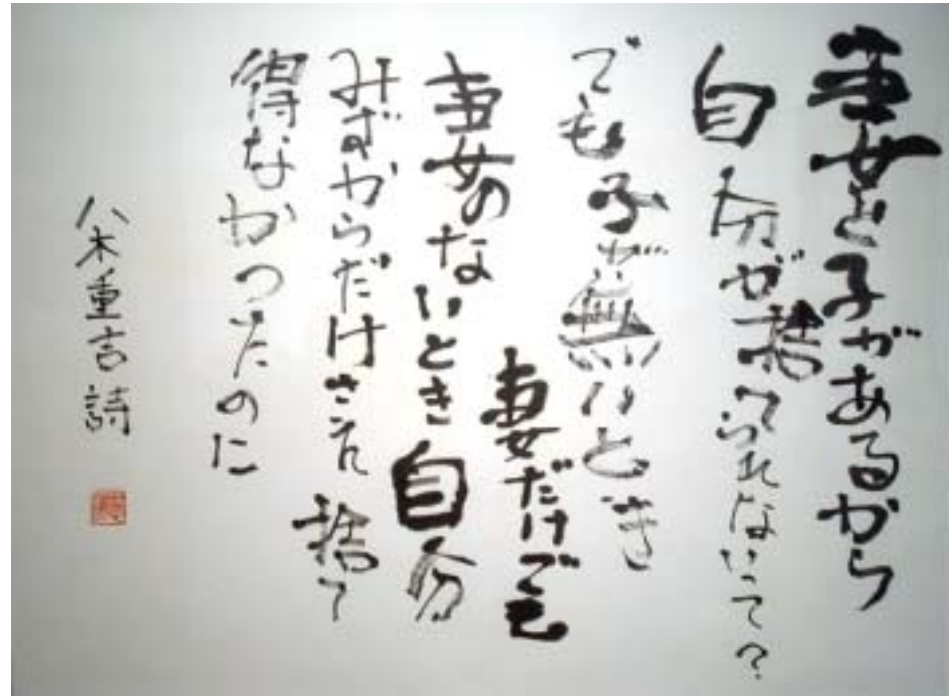
天守閣 (全紙 1/3)

自分の身の程を知れば、いつも「幸福」です。こうして毎日生きていられる。「生きていて何不足！」



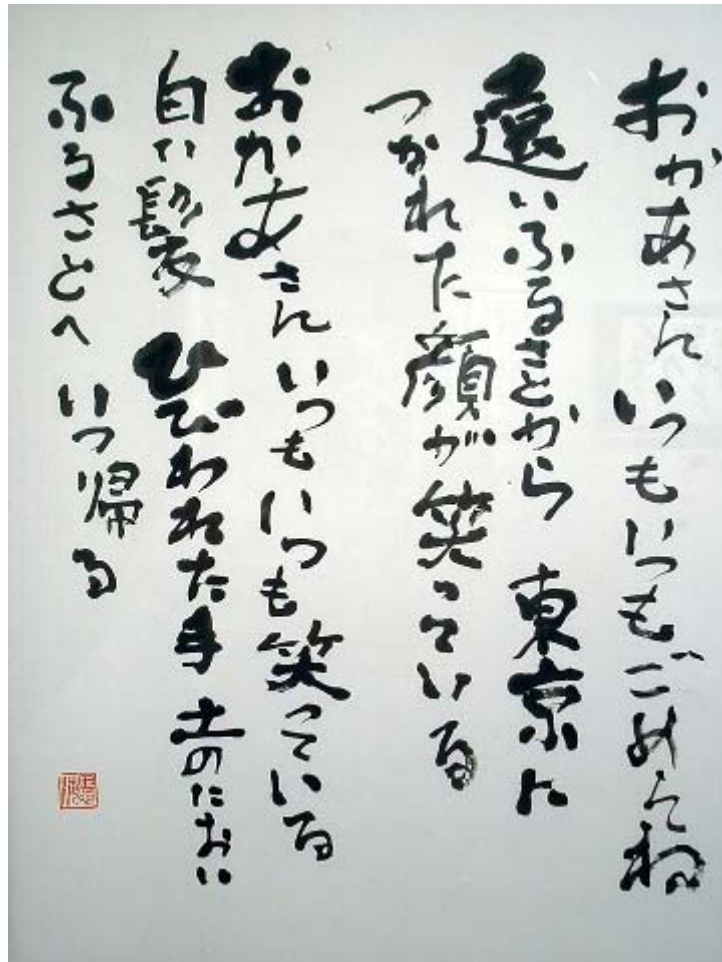
神は一人であり (全紙 1/3)
八木重吉詩集から

つまらないことにこだわっている自分が、
情けなくなることがあります。



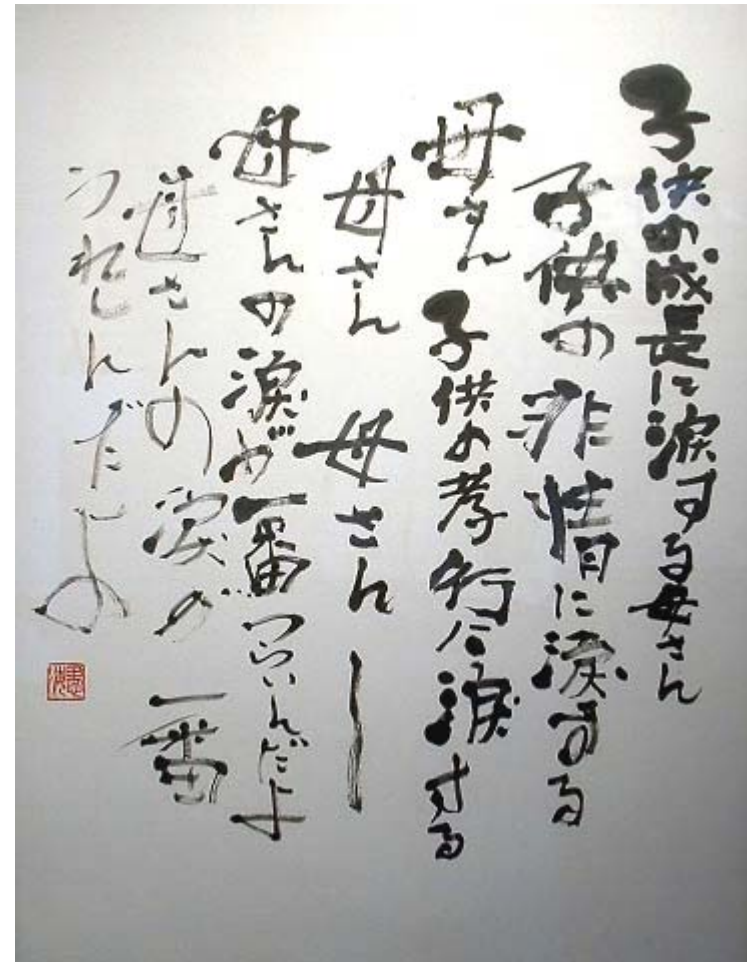
私に (全紙 1/3)
八木重吉詩集から

百尺竿頭一步飛び込むか、否か・・・ですね。



ふるさとへいつ帰る (全紙 1/3)
詩集「おかあさん」から

母親には感謝の思いと申し訳ない思いがあります。
でも時々それらから解放されたいと
思うこともあります



母さんの涙 (全紙 1/3)
詩集「おかあさん」から

自分の子供をもってしみじみ実感します。
親にはいくら年老いても、子供には追い越せない
何かがあるようです。

大字に挑戦

初めて全紙大の一字書に挑戦しました。
墨をふんだんに擦って準備して、何を書くかを考え、
さあ、イザ筆を持った。
しかし、筆が紙に触れた途端！ 頭の中、真っ白け・・・
ようやく、最後まで筆を引きずったが、散々ですね。
じゃ、次の紙！ 意気込みは良いが、またも哀れな結果・・・
あまり構えすぎ、考えすぎも、キゴチナクなくなってしまふ。

あわれ大きな夢は、はかない夢となってしまうました。
今二見テイロ 僕ダツテ 明日八大キナ ヒノキニ ナロウ
素晴らしい経験でした。 まずはやってみることに
こつこつと成長をすることですね。



儂い「夢」 (125×125cm)

マザー・テレサさんの言葉

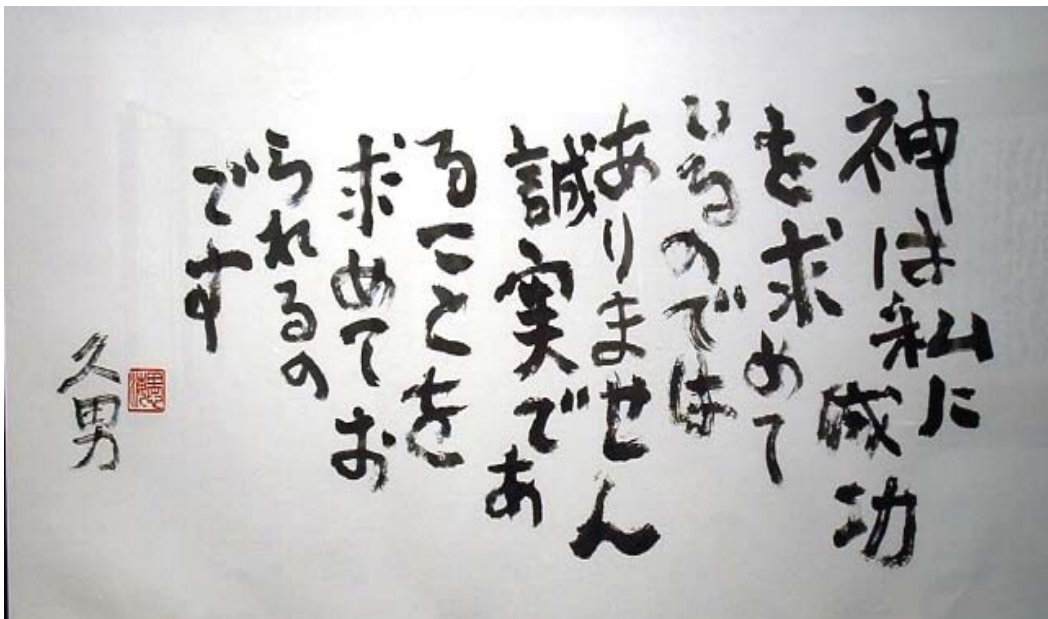
ある米国上院議員はかつてマザー・テレサにこう尋ねたと報道されている。「あなたは膨大な貧困に対して、自分が実際にしていることがいかに小さいかを考えてがっかりすることはないのでか」それに対して彼女は「神は私に成功を求められているわけではありません。誠実であることを求めているのです」と答えたという。(キャサリン・スピנק著「マザー・テレサ」より抜粋)

マザー・テレサさんは、私の最も尊敬する方でした。一九九七年九月、あのダイアナ妃とともに永眠されてしまいました。(とても悲しかったことのひとつです。)

現代では、一つの行為に、何かしらの報酬を求めるのが常識のようですが、世の中にはそうでない人も少なくありません。意外に近くにいることもあります。たとえば自分の奥様や会社の中でも見立たず、ひたむきな方がいるのではないのでしょうか。

さまざまな慈善事業やボランティア活動が、盛んに展開されている実社会で、私は何一つ積極的なかかわりを持つとしていません。たぶん私も世間並には、金銭的・時間的に余裕ある人間であるのに、情けなく感じてしまいます。でも「世の中には、あなた以上に裕福な人間もいれば、逆に悪人もいるんだから、そう悲観すんなよ。」と言ってくれる人もいるかもしれませんが、それは相対的な話です。

そうではないのです。『神さま』から「あなたが行なってきた行為は、私(神さま)が望んだ行為ですか」と問われたとき、真か、否かなのです。自分よがりなことが多い・・・なかなか自分を捨ててまで神に仕える事はできない・・・」何故?」と考えると「ころ」に問題がありそうです。



愛による裁き (半切 1/2)

マザー・テレサさんの言葉2

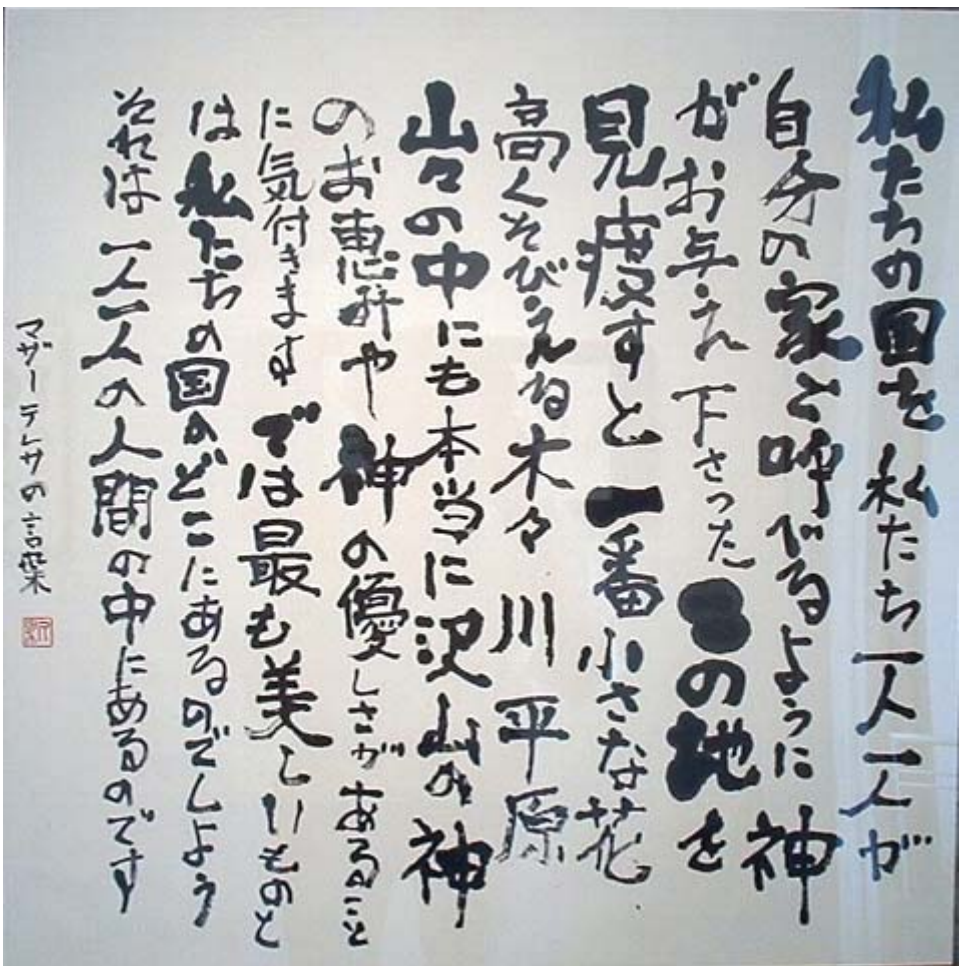
マザー・テレサにとって最も重要なのは問題を解決することではなく、人々に影響を及ぼすことであったのだ。彼女は貧しい人にただ魚を与えるのではなく自分たちの食料を自ら獲得するための釣りざおを与えるべきだと非難され、「この上なく深いため息をついた。」

「ああ、神よ、この人たちを見て下さい。釣りざおを使わせようとしても、この人たちはそれを持ち上げる力すらありません。魚を与えることで、わたしは彼らが明日の釣りのために力を回復するのを助けています。」

マザー・テレサはかつてダイアナ妃にこうアドバイスしている。

「苦しい時や絶望した時には、苦しんでいる人々とお会いなさい。すると今度はその人たちから会いに来てくれるのですよ」と。

「私たちの国を、私たち一人一人が自分の家と呼べるように神がお与え下さったこの地を見渡すと、一番小さな花、高くそびえる木々、川、平原、山々の中にも本当に沢山の神のお恵みや神の優しさがあることに気付きます。では、最も美しいものとは私たちの国の一体どこにあるのでしょうか。・・・それは、一人一人の人間の中にあるのです。」



神のみもとへ (全紙 1/2)

父の祈り

わが子よ、疲れたら帰っておいで
生きてゆくのに疲れた子、老いて疲れた子、病気で疲れた子、死を前にして疲れた子、
怨み憎しみで疲れた子、思い通りにゆかず疲れた子、愛しい者との別れに疲れた子、
人の世の世話に疲れた子、裏切られて疲れた子、捨てられて疲れた子、
四苦八苦、何も彼もに疲れた子、
みんな、帰っておいで
ほこりにまみれ、泥にまみれ、傷だらけ
待っていたよ、

お前が、そうなって、気付いて
思い出して、帰ってくる日を
さあ、お前が帰ってくるたびに、
私は、お前の帰る家と部屋と布団と、食べるものと、
お前が必要とするもの全部、用意して待っていたよ
心配するな、解っているよ
お前は、自分にそんな資格があるか、とでも思っているのだろう

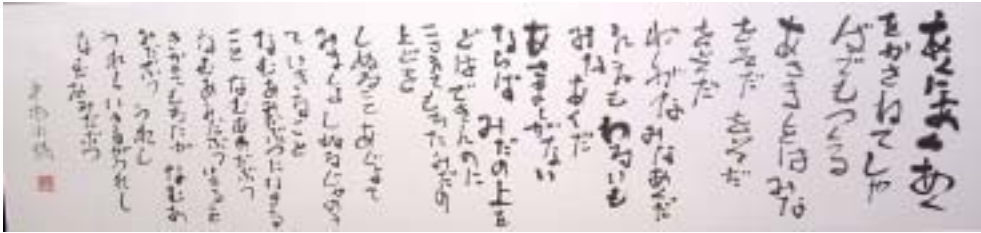
取り越し苦労というものだ
お前が思っているよりも、もっと私の思いは切実なのだ
苦労しているお前を思うと胸が痛む
疲れたら、いつでも帰っておいで
お前には、父の家がある

お前が努力したってしれたものだ
お前が何を言っただってしれたものだ、何をしただってしれたものだ
お前が何を考えたって、底は知れている
父は、全部、お前を見通している

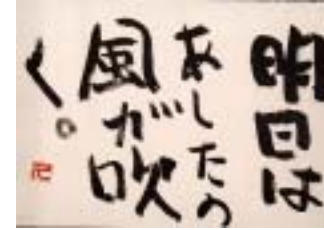
さあ、見栄や遠慮は捨てて早く帰ってくるがよい
お前には、結局、何もできはしないのだ
もつ、そろそろ、悟ってもよからう
何も持たず、裸足で、ほこりまみれの姿で、そのまま、そのまま直ぐに帰ってきなさい
言っな、父の前で、何も言っな
解っている
黙って帰ってくればよいのだ

お前は疲れている
すっかり、お前は元気を無くしている
帰ってくるんだ、直ぐに元気になる
私は、お前のために、もつ、とっくに、お前の家を建てておいたのだ
いつか、帰ってくるお前を、久しく待っていたのだ

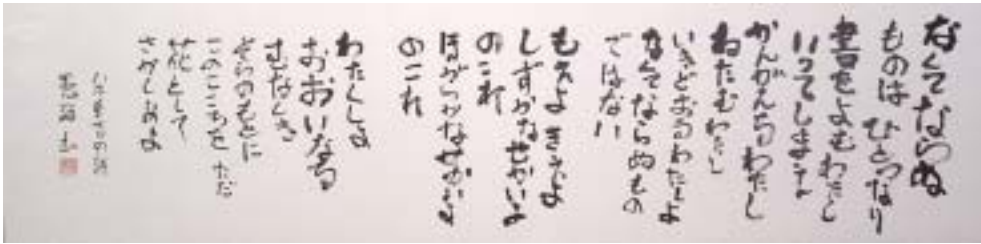
私の愛するのは、お前だけなのだ
さあ、きょうもまた、お前のために、お前のハートに届くように夕の鐘を打つことにしよう



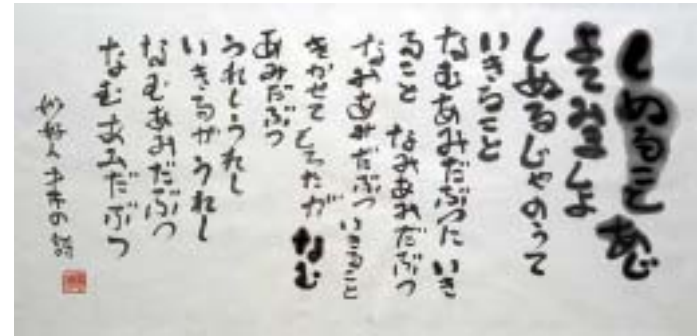
浅原 才市さんの詩2



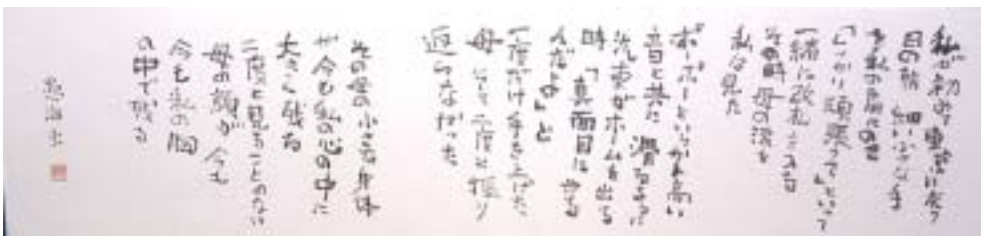
明日はあしたの



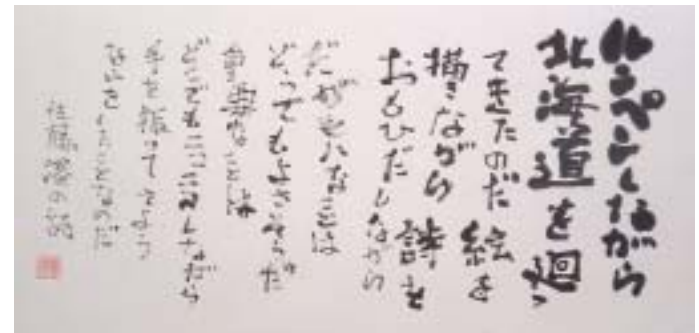
八木 重吉さんの詩



浅原 才市さんの詩



別れ (詩集「おかあさん」から)



佐藤 溪さんの詩



至誠



好古



好古



一笑百慮忘



好古



百鍊



守一



心醉



玄同



大一



長樂



知止



不器



春望



平安



会场風景



ご来場ありがとうございました！





お礼の言葉

この度の第1回書作展に、ご多忙中にもかかわらず、ご来場いただき深く感謝申し上げます。ちまたは猛暑でしたが、私の心中は冷や汗のかきどうしの個展でした。しかし大変意義深いものがございました。会期中に皆様からいただきましたご厚情・ご教示を糧として、次回展に向けて研鑽を重ねてまいります。今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。末筆ながら皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

平成15年8月 植田久男（愚海）

茨城県水戸市元吉田町789-4

電話：029-246-0461

E-Mail: gukai369@yahoo.co.jp

水戸・千波湖花火大会（8/1）

